

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ビザンツ文学余滴 第3回（通算第4回）：コンスタンティノス・マナセスのエクフラシス
Author(s)	戸田, 聡
Citation	プロピレア , 25 : 73 - 83
Issue Date	2019-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048245
Right	Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ビザンツ文学余滴 第3回（通算第4回）

——コンスタンティノス・マナセスのエクフラシス——

戸田 聡

北海道大学准教授

翻訳序*

今回の翻訳については、まず文章それ自体を読者に見ていただくのが良いのではないかと判断し、先に訳文を掲げて、そのあとで筆者が御託を並べることとした（自分で「御託」と言うのもなんだが）。もちろん、読者には筆者の駄弁を先に読むという選択肢もある——もしそうしたいのならば。

* * *

ズアオアトリやゴシキヒワを捕まえるの記 エクフラシス

コンスタンティノス・マナセス

かつてはコンスタンティノープルも暖かい浴場を欠いており、浴場に関する限り、プロポンティスの上流側の部分は、渡った対岸の側から見て窮屈だった。だが、同地は優美であって、休日を過ごすのに適しており、木々の鬱蒼とした

* 本稿で使用する略号は次のとおり。

LBG = E. TRAPP (ed.), *Lexikon zur byzantinischen Gräzität besonders des 9.-12. Jahrhunderts*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften

vol. 1: A-K, 2001

vol. 2, 1. Teil: *Α-προσπελαγίζω*, 2017

vol. 2, 2. Teil: *προσπέλασις-Ω*, 2017

Verzeichnis der Abkürzungen, 2017

緑深い庭園や、清らかな水の流れの横溢がある。海は岸边とたおやかに戯れ、穏やかな波で陸地にほほ笑みかけ、それらは目に対する讃辞となり、感覚に対する饗宴となる。私も上って行ったのだった。というのも、肉のうずきがそう命じていたからであり、時は収穫のすぐ後だった。そして私は、桶のような小舟からちょうど上がって、浴場の入り口あたりにいた。友人の一人であって最も優美な友人が、顔と顔を合わせて私に会った。道理のわかった挨拶をし、彼は付け加えて「おい」と言った、「君は体を浴場で休めろよ。僕は君が宿る場を用意して君を歓待し、おもてなししよう。またお望みなら、来て泊まって甘い見ものを見ると良い。また、もし面倒でなければ何日間か泊まると良い、そうしたら健全な楽しみを味わうことになるだろう」。

こう言うと彼は立ち去り、数時間経って戻ってきた。ちょうど私は、浴用のかけ布をかけて横になったところだった。相当に無理強いをして、彼は私を客扱いへと引きずり込み、ついに勝利した。そこで（というのも、時は遅く、浴場自体がそうするように促していたので）、私たちはそこに滞在し、今やほとんど夜が明けそめ、薄明の時だった。すると、騒々しい音がテントをとらえた——お互いを眠りから覚まし、仕事へと起こし、遅さを叱るという、卑しからざる励ましの声があった。鳥捕りへのこのような熱心さが、彼らの中には燃え上がっていたのだった。多くの少年や、少なからぬ若者がいた。また、鳥捕り術のオリュンピア的勝利に幾度も輝き、幾多のこのような競技を闘った闘士であり、かの若者たちをこのようなパンクラティオンで鍛えるという、年を経た年長の男が一人いた。彼らは速やかに衣服を着、身に着け（というのも、監督たる老人が急かしていたので）、羽根付きの足で持ち場に就くよう急いだ——そこに於いて、すずめたちに対してわなを仕掛けるために。これほどの熱意の結果を見届けるべく、私自身も後を追ひ、そこに上って事の次第を見た。そして、それは実に優美で、私の魂に快樂を滴らせてくれたのである。

事の次第は次のようだった。実際、記録することにもよって、私がこの見ものを楽しむことから、何が私を妨げるだろうか。その場所は、私たちが宿りをとったテントから少ししか離れておらず、全く風が吹きさらしてもおらず、ものすごく高くもなければ、低くて地を這うようでもなく、畑よりも高く、空気の流れが穏やかで、風通しが良く、そよ風を受け止める場所だった。また、ここでは植物は香りが良く、あらゆる種類があり、足がかすかに触れると、鳥捕り術の御神酒として、香草にもインジゴにも優って、何という匂いを鼻へと運んだことか。香りの良さはそれほどのものだった。また、青々とした草が豊か

に敷き詰められており、目を向け手で触れるのに良く、横たわるのにも、心地よい寝床を地面に即席を作るためにも柔らかい。そこに於いて彼らは、手の中にあるものを荷降ろしし、狩猟に適当な各々異なるものを手にして、仕事にとりかかり（人はどう言うだろうか?）、葉を取り除いた枝を注意深く地面に当てて砕いた。それら枝はそれ自体では皮が剥かれておらず、ひからびていた。指導者はそれらの皮を予め剥き、そしてそれらは月桂樹の枝と合わさった小枝を持ち、周囲に他の葉を配して、異種の若枝によって緑づいていた。列を成すようにそれらは並べられていた。草々の園、とそれを譬える人もいるだろう。枝々のあるものは不均一なその姿を保ち、豊かに繁茂する月桂樹によって覆われており、枝々の他のものは円状に曲げられ、しかしながらすべての枝が、月桂樹の葉を身にまとっていた。加えて、どこかから彼らは柳の細枝を持ってきて、それに鳥もちを塗りたくり、月桂樹の中に置かれたかの枝につけ、巧みに仕掛けを配置した。かの白髪にして高齢の男——数多くの戦争で鍛えられた軍師、と呼ぶ人もいるだろう——がすべてを差配していた。編まれた要塞の中に閉じ込められた、手なづけられたすずめたちを、少年たちは運びつつあった。四十雀しじゅうからがおり、ズアオアトリやゴシキヒワがおり、ズアオアトリぐらいよりも大きく声も低い別のすずめがいた。その名前を私は知らない。また、彼らは非常に美しい別のすずめも運びつつあった。目に麗しく、みめ見目良く、聞けばよくさえずり、目を楽しませ、かつ色々な音ねを出すすずめだった。その頭は赤紫色に染められており、羽根には様々な色がついていた。輝く羽根であり、紫色をしており、星がちりばめられたようで、金の羽根だった。赤いヘルメットのそのすずめを老人は星の光と呼んでおり、その美しいさえずりを自慢し、それを持っている者はクロイソスよりもアンティオコスよりも幸せな運命の者だ、と言っていた。さて、それら鳴くすずめたちをお互いから離して彼らは連れて行き——そうするのが良いと、仕掛けの監督は判断していた——、そこに座り、バツと空中を見やり、雲を眺め回していた。こうして、彼らがすべてのたくらみを準備し終えるや否や、また、手なづけられたすずめたちが、手づくりの罫のあたりを飛び回りバタバタ言わせていた時、空気が少し動いて、微弱な霧を注ぎ出し、小さな羽根の群れがあたりに観察された。老人が最初に、その羽ばたく音を感じ取り、子どもたちに沈黙を命じた。次いで、それらは葉や花のようにやって来て、空中の蠅よりも牧場の草よりも大きくなり、そしてその羽ばたく音はすべてを満たし、少年たちはこの出来事に歓声を上げた。すると、老人は彼らに対して怒り、哀れな者たちをほとんど打擲ちょうちやくせんばかりだった。手

なづけられたすずめたちは叫び声によって四散した。そして、上から飛んできたすずめたちは、鳥もちのついた竿にとまり、或るものたちはからめとられ、他のものたちは逃げ去った。というのは、鳥もちが湿って、粘り気を保たなくなりつつあったからである。競技場の主たるかの老人は、怒って獐猛な視線を送り、甚だしい不注意を難じて自分の腿を数度叩き、両手を何度も打ち、大惨事を蒙った者のように嘆き、少年たちを呪い、かつ忌むべき呪詛によって召喚し、地と太陽を証人として、狩猟の守護者たる諸力に祈願した。さて、彼らは捕えられたすずめたちを集めて、獲物を注意深くより分けた。メスはすべてさっさと殺して、くぼみの中に放り込んだ。というのも彼らは、哀れなメスたちに溝——ハデス、或いは大口を開けた墓、と呼ぶ人もいただろう——をも割り当てていた¹からである。オスについては区別を行ない、一部は生かしておいて檻に入れ、他の一部については羽根をむしり、火で焼いて骨ごと飲み込んだ。というのも、彼らはそこでたまたま、火もとっておいてあったからである。かの教師、部隊長は慰められようとせず、不機嫌で平静を失っており、心から嘆息していた。とうごまの木がしなびたことに対して、ヨナはこれほどには憤慨しなかつただろう。そして再び、彼らは鳥もちのついた柳の枝を塗り込んで、すずめたちに対するわなを準備した。すると、非常に大勢の群れがどこかから飛んできて、落胆を終わらせた。というのも、群れ全体が全く捕えられ、一羽の使者ですら使信を欠くことのないほどまでに、みな落っこちてきたからである。その時初めて私は、かの非常に高齢な合唱隊指導者が顔の曇りを緩めて、朗らかにほほ笑むのを目にした。だが彼は、眉にしわを寄せて尊大に振る舞い、偉ぶって思いを太陽の周りに馳せ、指先で数えて獲物の捕獲の成功を言祝いだ。そして偉ぶったり尊大にして、彼はもはや耐えがたい輩だった。エジプトに於いてカンビュセスはこのようではなく、バビロンに於いてメガビュズスはこのようでなかった。

そこで、捕獲されたものが集められ、その光景は魅せられるものだった。或るものは頭を撃たれ、他のものは羽根がくつつき、他のものは腹と足が〔鳥もちで〕汚れていたのだ。皆によって、胸とくちばしが開かれた。鳥たちは最後にあえいで、残りの息をしていた。さて老人は、おごそかに語り、非常な豊穡

¹ 原文は ἐπινομούσαντες。STERNBACH, “Analecta Manassea”, *Eos* 7 (1901), p. 188 (本訳文の原文の出典(後記)を参照)では、ここでの正しいであろう読みとして ὑπονομούσαντες が挙げられているが、*LBG*, vol. 1, p. 576 s.v. ἐπινομούω ではまさに本訳文の原文の箇所が挙げられ、「zuteilen, bestimmen」との語釈が施されている。

を予言した。加えて、彼は鳥もちのついた柳の枝からすずめたちを抜き去り、唇と指を使って羽根をきれいにした。鳥もちがあごにくっつき、ひげにしっかりと付着していた。だが彼は、そうでないふりをし、注意も払わず、最終的に御しがたい仕方では正気を失っていた。

これらのことがあり、加えて、極めて優美な別のことが起こった。翼の長い或る鳥が、ゴシキヒワを追いかけており、一方はヒューという音とともに動き、他方は逃げていた。一方は捕まえることを渴望し、他方は何とかして逃げようとし、曲がりくねりを多用した。そして草の上に来て、そのすずめを捕えようと急いで、何でも屋になった。ところが、あせって羽根を広げ、怒りに駆られた時（というのも、最も見事なその腹が急かしていたので）、不注意にもその鳥は、鳥もちのついた柳の枝のかたわらを通り、何かをしでかしたというよりむしろ受難して、狩猟をやりそこなって簡単に捕まる者となってしまった。かくて、ほとんど雲の上の者が、子どもの手によって手づかみにされたのである。それに続くことを誰が記録に付するだろうか。叫喚と叫びが起こり、ざわめきが空を満たしたのだ。要塞が攻め取られたか、いくつもの物見やぐらをめぐるものが崩落したかと、人は言うだろう。それほどの轟きが起こり、それほどの笑いが立ちのぼったのだ。そして卑しからざる競走があり、お互いがお互いに先んじようと急いだ。その時、この出来事の主宰者である老人も、若者たちと張り合い、白髪をものともせず、そこでだけは、それまでの自分を忘れて一緒に走り、負けじと走った。というのも、彼は快樂に流されて、憑かれた者のようであり、自らを抑制することができず、たづながはずれ、くつわがはずれた者となっていたからである。しかしどうやら、出来事の何一つとして、復讐なしではなかったようだ。裁きの女神は老人に対して憤り、無頓着に振る舞っていた彼は、枝で編んだかごにぶつかって、哀れにも顔面から倒れ込んだのである。そして帽子は、仕掛けから飛び出すかのように、円盤よろしく遠くへ飛ばされ、湿った粘土の地面に着地した（つまり、その地の一部は若干粘土質だったのである）。両手のひらは負傷し、口はまわりが土と草だらけになり、ごみのようなものでふさがれた。しかし、これは老人にとって問題でなく、彼は起き上がると再び、より一層速い競走選手のように駆け出した。その時初めて私は、熱意は老齢をも圧倒し、願望は、年齢によって緩和されたものを何ほどか暖め、一層盛んにするのだ、ということを知った。しかも実際、このような悪霊と戦い、歯を攻撃されてやられる危険を冒しながら、それでも彼はそれを脱し、若者たちに先んじて最初に鳥殺しの鷹のところにやって来て、大獵を告げ

知らせる最初の使者となった。そして帽子のことや、唇と両手のひらの裂け具合には、夢においてすら注意を払わなかった。覆われておらずハゲゆえに輝きわたる彼の頭頂部を目にしたので、私は笑い死にするところだった。そして私には彼は、ディオニュソスに付き従って杖を担う老人のような者としてギリシア人の子らが物語っていた、そのような人のように見えた。〔以下この段落の終わりまではベック『世界論』で省略された部分（戸田）〕老人の頭はむき出し、頭頂の髪の毛は不存在で、まゆげは瞼の上に鎮座してもじゃもじゃで真っ白、鼻は終わりのほうで一層ふくれ、棍棒のようにふくれかつ丸まっていた。あごは毛ぶかく、これも真っ白だった。服の下部は地面のところどころで上方へと縛り上げられていた。履き物は幅広で、悲劇の編み上げブーツのように大口を開けており——と言う人がいただろう——、巨人の足を容れることができただろう。そして姿の点でこのような者であって、彼は戻り（?）、かつ若干粘土質で（?）、一方で多くの人々に笑いを惹起し、他方で彼らはこの小老人を化け物のように恐れ、かつ歯を見せて嘲笑し、そして再び、より激しい雨とすずめたちが同族の鳥たちの接近を知らしめていた。そして、覆われていない老人は忍耐づよくあって、こちらからそちらへと向き直って、影と戦っていた。そして1人の少年が穏やかにつぶやき、鋭い〔臭いの?〕胆汁（?）が老人の鼻に飛んできた。すると老人は重い杖を手執って、憐れな者をその場から追い出した。一方〔すなわち少年〕が大急ぎで逃げ出したその方角へ、他方〔すなわち老人〕は全力で追いかけた。すると再び、「裁きの女神は生起する諸々の事柄の見張り手である」という。そして再び老人は顔面から〔倒れ込むこと〕となり、思うに多くの歯を打ちつけ、短時間で何かを装うことはなかった（?）。これらに比べれば、狐の仔を盗んで懐に入れて運び、中の物に引っかかれて、労苦多き引き裂きを耐え抜いて当の物を自分の腹に収めたという、かのラコニア人は何ほどのものだろうか。

ほどなくして、ズアオアトリが上空高く飛んでいるのが見え、そして私は狩猟の別の新たなやり方を目にした。張り詰めた細いひもがあって、このひもの先が、例の月桂樹の枝々の植え込みに結びつけられていた。ひもには生きている年老いたズアオアトリが結ばれており、ひものもう一方は子どもが任されていた。すると直ちにズアオアトリが大勢でやって来て——無数の軍団が、と人は言うだろう——、そして子どもはそっとひもを搔き立て、あわれなズアオアトリに羽ばたきを今一度思い起こさせた。鳥は自ら進んででなく羽ばたいて、同輩たちを調教させた（?）。その時、惜しめない開花が起こり、穴が満たさ

れ、編んだ牢獄は窮屈となり、生け捕りにされたものがそこへ送り込まれてきた。これに加えて、我が案内人が食事を用意し、即席の食卓を提供した。そして一方で、他の人々は食べ物に満たされ、見ものを楽しんだ。というのも、多くのすずめたちが落ちてきたからである。他方で老人は、飲まず食わずであり続け、鳥もちで捕まったものたちを見ることによるのみ養われていた。[ここから以降はベック『世界論』で省略された部分(戸田)]もし、絵を描くことによってさらに苦しめられて食事をも忘れたという画家ニキアスについての話が……²ならば、しかし私はこの人間を剛直さ[そのもの?]だとみなし、また、夕方まで……³苦闘した者、滴^{しずく}を喰らう者——と言う人がいるだろう——、或いは空気を喰らうセミだとみなした。そして既に子どもたちに熱心さの火がつけられ、[老人から見て]使用人[である子ども]たちは乱暴にののしり、お互いに対して毒づき、各々が他者に非難を浴びせていた。つまり、「足の萎えている者のそばに住んだなら、お前はちっとは足の引きずり方を学ぶだろうよ」などと言うのである。そして各々が他者を凌ぐことに熱心だった。かくて熱心さは悪霊的だった、かくて愛は気づかれずに狂気へと拉し去られた、のであり、そして再び大勢の群れがヒューヒューという音で空を満たし、すずめたちはお互いよりも先んじようと、破滅へと急いだ。そして一羽が欺かれるや否や、彼らは手で切った枝でそれらをはたき落とす。そしてすずめたちは地面に満ち、少年たちは皆仕事に就いており、誰一人怠けていなかった。捕まえられた鳥たちを集める者たちがいれば、[そこいらに散らばった?]細枝をきれいに掃除する者たちがおり、他の者たちは新しい鳥もちを塗りたくっており、他の者たちはすずめ殺しとなっていた。手から血が滴^{したた}っている者たちがいれば、指に翼がついている者たちがおり、それから、手のひらが鳥もちまみれの者たちがいた。服をたくし上げた者たちがいれば、髪の毛を巻き上げた者たちがいた。気を配る者(?)がいれば、走る者がおり、戻って来る者(?)がいた。そして獵は成功だった。もしたまさか何か逃げおおせたなら、各々が他の者を責任ありとして、各々が感情に駆られ、各々が他の者を失策ゆえに告発していた。それから私は、一羽のすずめが鳥捕り[者]の手の中にあるのを目にし、自然本性の野心に驚嘆し、また、美のどれほどの富がそのすずめにあふれているか

²3 点リーダーを付することとしたこの部分は、原文(eiで始まる条件節)では特に欠落の表示が見られるわけではないが、節の動詞が見当たらないので、意味から見て何らかの欠落があると考えざるをえず、3点リーダーを付することとした。

³こちらの3点リーダーの部分は原文の欠落の表示に対応している。

に驚嘆した。尖った細い嘴、黒い頭、全体がやや黄色がかった背中の上方部分、黒い翼。また、サフラン色の染料が下から光っており、それは、誰かが亜麻に金を織り込んだかのように思えるほどに見えた(?)。そして羽毛には巧まざる飾りがあった。喉と胸は金色がかった。尾のどれほどの部分が雪に覆われたように白かったことか! それはそこここに黒色の刻印を帯びてもいた。それは恐るべきものであり、絶えず動いていた。それは戦^{いくさ}の踊りを踊っているのだ、と言う人があるだろう。それは甘美な^{ふし}節を胸から奏^{かな}で出しており、見るにそれはかくも優美で、聞くにそれはかくも良いものだった。[ベック『世界論』で省略された部分はここまで(戸田)] 私にとって、この獵の出来事は歓迎すべきもの、喜ばしくかつ同時に疲れさせないものであるように思われ、何度もそのことを我が案内人にほのめかした。すると彼は言った、「君のために、そのような友情の杯を僕は飲み干そう、かくも愛すべき、かくも心を喜ばせる杯をね。しかし、もし君が望むのなら、君もまたお返しの気持ちを示して、目にしたことを書き物にしたらよい。そうすれば君自身、我々に案内のお返しをすることになるのだから。そして我々には、この獵を見渡す入り口が開かれていることになる」。私は言った、「そうなるように。君のために、私は書き物の友情の杯を飲み返そう、そして都合の良い機会を得たなら、この美しい儀式を君のために書き記そう」。そしてそれゆえに私は、我が案内人を喜ばせるべく、そして私自身のためにこの見ものの記憶を救い出すべく、このことに専心したのである。

* * *

今回訳出したギリシア語原文を収録しているのは L. STERNBACH, “*Analecta Manassea*”, *Eos. Czasopismo Filologiczne Organ Towarzystwa Filologicznego* 7 (1901), pp. 181-186 であり、訳文の相当部分は拙訳のベック『ビザンツ世界論』(知泉書館、2014年) 514-520 頁に収録されている。つまり、この「余滴」第1回の場合と同様、今回の訳文は『世界論』所収の訳文からの大幅な転載ということになる。但し、これも第1回の場合と同様だが、『世界論』所収の訳文には部分的に省略があったので、今回の訳文ではその省略部分を補って当該原文の全訳としてあり、かつこの機会に『世界論』所収の訳文を部分的に修正した(段落区分もこの際原文のそれに合わせた)。

著者コンスタンティノス・マナセス⁴について別段入れあげて勉強してきた

⁴ この著者に関する概説的記述は次のとおり。H. HUNGER, *Die hochsprachliche profane Literatur der Byzantiner*, vol. 1: *Philosophie - Rhetorik - Epistolographie - Geschichtsschreibung - Geographie*

わけでは全くない筆者が、ここで書けることは多くない⁵。ではなぜ今回これを扱うかという点、例によってそれは、筆者が敬愛して已まないベック氏にかかわる。つまり、なぜベックは鳥捕りのこんな文章を『世界論』のビザンツ文学抜粋の中に含めたのか、という点が以前から気になっていたもので、と言うか或いはむしろ、この点についてしばらく前に或る思いつきを得たので、それを記してみたいと思ったのである。

今回訳出した文章はエクフラシスというジャンルに属する。渡辺金一氏がベック『ビザンツ世界の思考構造』（岩波書店、1978年）に付した「レトリック用語解説」によれば（232頁）、「エクフラシス（ἔκφρασις）一人の人間、ないし、一箇の対象を詳細に叙述すること」とあり、或る種の習作と解することも可能ではないかと思われる。コンスタンティノス・マナセスに関する概説的記述の中には、今回訳出した文章について、「マナセスはこの文章の中で、みっともなく振る舞っており獐猛に見える高齢で禿頭の指導者に集中しており、アンドロニコス1世のことをほのめかしているのではないかと仮説を立てることが可能である。なぜなら特に、話によればこの指導者は鳥の群れ全体を捕まえており、そこには「使者（アンゲロス）」が残っていないからだ」と深読みする解釈も見られる⁶。この解釈が当たっているかどうかを判断する能力を筆者は持っていないが、少なくともベック自身は『世界論』の中でこれに類する解釈を示してはいないし、そもそもマナセスについてほとんど何も記していない。筆者自身がここで論じたい上記の問題も、全く別の事柄だと言ってよい。

上掲の「レトリック用語解説」に照らすなら、確かにマナセスは1人の人物すなわち「高齢で禿頭の指導者」たる老人に集中していると言えるだろう（最後のほうで一羽のすずめ(?)に関する細密な描写も見られはするが)。そし

(Handbuch der Altertumswissenschaft, 12.5.1), München: C.H. Beck, 1978, pp. 419-422; W. BUCHWALD, A. HOHLWEG, & O. PRINZ (ed.), *Tusculum-Lexikon griechischer und lateinischer Autoren des Altertums und des Mittelalters*, München: Artemis Verlag, 1982, pp. 495-497; A. KAZHDAN, "Manasses, Constantine", in: A. KAZHDAN (ed.), *The Oxford Dictionary of Byzantium*, vol. 2, New York/Oxford: Oxford University Press, 1991, p. 1280.

⁵ なお、マナセスの著作目録は今や *LBG. Verzeichnis der Abkürzungen* の pp. 45-46 に略号表 (Manas から ManasStich まで) という形で見られる。このうち、20世紀初頭に校訂・刊行されたマナセスの著作のうちいくつかはその後再校訂によって置き換えられているようだが、幸か不幸か、本稿のギリシア語原文については、20世紀初頭の Sternbach による校訂 (典拠については本稿解説の冒頭を参照) 以降に再校訂は行なわれていないようである。

⁶ KAZHDAN, art. cit. (n. 4)。この解釈によれば、「アンゲロス」はビザンツ帝国における名門「アンゲロス家」のことを指す、ということなのだろう。

てこの老人の描かれ方はと言えば、き わ め て 醜悪である。今回、訳文を補完する際に追加した、ベック『世界論』の省略部分の中には、この老人の外見などを詳細に記した箇所があり（箇所がはっきり特定されるようにと、訳文中に「以下、この段落の終わりまではベック『世界論』において省略された部分である」と補記しておいた）、ここを読めば老人の醜悪さはとりわけはっきりする。但し、ベック『世界論』のようにこの部分を省略していても（或いはこの部分をベックは、文学的に優れていないと判断して省略したのかもしれない）、老人の醜悪さは一目瞭然だとは言えよう。そして、著者が老人に対して1ミリの同情も持っていないということは、当該箇所の直前に出てくる一文「覆われておらずハゲゆえに輝きわたる彼の頭頂部を目にしたので、私は笑い死にするところだった」から明白である。つまり著者マナセスは、自分が少しも同情しない人物を詳細に描くことに固執したわけである。これだけでも既に充分、この文章の醜悪さ・悪趣味ぶりは明らかだろう。

しかしそれだけではない。すなわち、著者マナセスは冒頭と結尾の両方において、盛んに「優美」だの「美しい」だのといった言葉を使っている。文章の大半を占める老人に関する描写が実に醜悪であるにもかかわらず、である。と考えると、実はそもそもマナセスが言う「優美」だの「美しい」だのといった言葉を、我々読者はむしろ皮肉、すなわち真反対の意味、だと受け止めるべきなのではないか、とすら思えてくる。そしてこのように考えると、例えば冒頭付近の次の箇所、「ここでは植物は香りが良く、あらゆる種類があり、足がかすかに触れると、鳥捕り術の御神酒として、香草にもインジゴにも優って、何という匂いを鼻へと運んだことか。香りの良さはそれほどのものだった」で言われている香りは、果たして本当に良い香りだったかどうか、むしろ真反対の香り、と言うよりむしろ臭い、だったのではないか、というふうにすら思えてくる⁷。つまり言い換えれば、著者マナセスは、全身が皮肉の毒に満ちていた御仁だったのではないか、と。

そしてさらに、今少し想像力を働かせるなら、空を自由に飛ぶ鳥たちが大量に捕まえられて地上に引きずり下ろされ、今にも殺されようとする時に、どのような叫喚を上げるかは、造作なくイメージ可能である。ここでは醜悪さは目

⁷ 著者マナセスの悪趣味ぶりは、例えば第4段落の次の文章からも明白だろう。「捕獲されたものが集められ、その光景は魅せられるものだった。或るものは頭を撃たれ、他のものは羽根がくつつき、他のものは腹と足が[鳥もちで]汚れていたのだ」。この光景のどこが「魅せられるもの」だと著者は言うのか???

や鼻からだけでなく、耳からも入ってくる。

一体、これほど醜悪な文章が世にまたとあるだろうか。

ひるがえって最初の問いに戻るなら、ベック先生が『世界論』の中でこの著作家について特段詳しく語ることなく、単にこの文章を、言わばビザンツ文学の代表選手の一人として文章選の中に含めたと理解できるとして、その意図は奈辺に存したのか。ビザンツ文学にはかくも醜悪な、かつ皮肉に満ちた文章があるのだということを示すこと、これなのではないか。文明が爛熟してついに腐臭まで上げるに至った、そういう文明ならではの醜悪さ、とも言えるかもしれない。

ベックは『世界論』の「第2版への序言」の中で皮肉についてこう述べている。「皮肉は、ふつうの言葉の並びから前触れなしに皮肉への移行が起こる場合には、特に許しがたいものである」。今回とりあげた文章はまさに、『世界論』の文章選の中で「前触れなしに皮肉への移行」をやらかした文章だったのではないか（もちろん、マナセスがやらかしただけでなく、文章選を編んだベックもまたやらかしたのである）。とりあえずこう考えることで筆者（戸田）としては一応得心した（あくまでも一応、だが）、ということを経験したかった次第である。

（通算第4回終わり）